

妊娠期における母親の子ども表象とその発達の規定因及び 帰結に関する文献展望

本 島 優 子

妊娠期は、身体・生理学的にも心理学的にも急激な変革期とされる (Cohen & Slade, 2000; Pajulo, Helenius, & Mayes, 2006)。この時期、女性には、体つきや体重などの身体的特質、および睡眠・消化・食欲といったホルモン分泌の絡む生理学のプロセスにおいて、激的な変化を経験すると同時に、心理学的にも生まれてくるお腹の子どもの誕生に向けて、母親となることへの準備を進めなくてはならない移行期の直中にある (Cohen & Slade, 2000; Brazelton & Cramer, 1990)。この心理学的プロセスにおいて、女性は、それまでの自己やアイデンティティを修正し、母親としての自己や子どもを含めた自己の感覚を拡大していくと共に、お腹の中で育ちつつある個別の存在としての子どもに関する表象を発達させていくことが必要となる (Cohen & Slade, 2000)。したがって、妊娠期は、母親の自己や他者についての表象が大きく変容、再組織化されやすい時期ということになる (Ammaniti et al., 1992; Fava-Vizzello, Antonoli, Cocci, & Invernizzi, 1993)。

そこで本稿では、妊娠期の母親の心理学的プロセスとして、特に母親の表象世界に着目することとしたい。Stern (1995) によれば、母親の表象世界は、子ども、自分自身、夫、実母、実父などについての実にさまざまな表象から構成されているという。なかでも、妊娠期は親となることへの準備を進めなくてはならない時期であり、とりわけ、この時期に、母親が子どもについての表象や母親としての自己についての表象を適切に発達させていくことは、後の安定した親子関係の形成にとって非常に重要である (Cohen & Slade, 2000)。近年、こうした妊娠期における母親の表象への関心が臨床的にも実証的にもとみに高まってきており、殊にアタッチメント研究領域では、後の子どものアタッチメントの発達への影響も含めた、妊娠期の母親の表象に関する実証的研究が数多く行われている。そこで本稿では、妊娠期の母親の表象世界の中でも特に重要とされる、お腹の子どもや母親としての自己についての表象に関して、主にアタッチメント研究領域で蓄積されてきた、これまでの実証的知見を概観・整理し、論考することとする。以下、本文では、最初に、妊娠期に母親のお腹の子どもや母親としての自己についての表象がどのように発達していくのか、主に初産の母親のケースを想定とした、表象の発達プロセスについて論じる。次に、こうした母親の表象がどのような要因によって規定されているのか (表象の規定因)、また妊娠期から出産後にかけて表象がどのように連続あるいは変化するのか (表象の時間的連続性と変化)、さらに出産後の母親の養育行動や子どもの発達にどのように影響するのか (表象と養育行動・子どもの発達との関連性) という3つの問題に関して、これまでの実証的知見に基づいて明らかにする。そして、最後にこの領域に残された今後の課題について議論することとしたい。

1. 妊娠期における母親の表象世界

1-(1)子どもについての表象

Slade & Cohen (2000) によれば、妊娠期に母親が自身とは異なる個別の存在としてお腹の子どもを認識し、情緒的に距離を置いたり、反対に（特にネガティブな）感情に強くとらわれたりすることなく、子どもに関わるポジティブ、ネガティブ両側面の感情やイメージをバランスよく柔軟に統合できる安定した表象を発達させていくことは、妊娠期における重要な課題の一つであるとされている。では、妊娠期中に、母親はどのようにしてお腹の子どもに関するイメージや表象を作り上げていくのだろうか。

妊娠初期¹は、つわりや吐き気、不快感など急激な身体的・生理学的変化が現れるものの、母親にとってお腹の子どもの存在はまだまだ実感されにくいようである（Brazelton & Cramer, 1990; Cohen & Slade, 2000）。Lumly (1982) の研究では、妊娠8～12週の初産の母親30人を対象としたインタビューのなかで、70%の母親が未だお腹の子どもが人間であるとは思えないと述べたことが報告されている。さらに興味深いことに、これらの母親の90%が望んだ妊娠であったにもかかわらず、母親のお腹の子どもへの感情的表現は希薄であり、お腹の子どもの存在に関する現実感乏しかったという。このことから、一般的に、妊娠初期においては、母親にとってお腹の子どもはかなり非現実的なものであり、したがって、子どもについての具体的なイメージや表象は未だ十分には発達していないものと思われる。

お腹の子どもについてのイメージや表象が急速に発達するのは、通常、胎動が始まる頃からのようである（Ammaniti et al., 1992; Stern, 1995）。一般的に、胎動は妊娠4～5ヶ月頃に感じられるようになるといわれている（Brazelton & Cramer, 1990; Cohen & Slade, 2000）が、この胎動が大きな契機となって、お腹の子どもの存在がよりリアルに実感され始めるのである。先のLumly (1982) の研究によれば、妊娠18～22週のインタビューのなかで、お腹の子どもの人間として思える母親の割合が63%にも増加したことが報告されている。この妊娠4～7ヶ月においては、お腹の子どもに関する表象が、その豊かさや特殊性、量において、急速に成長していくものと考えられよう（Stern, 1995）。しかし、こうした母親の表象は、一見、このまま出産まで豊かに発達し続けそうであるが、実のところ、妊娠7ヶ月頃にピークを迎えると、それ以後の発達停滞するらしい。Stern (1995) によれば、そこには、母親の表象上の赤ちゃんとの現実の生まれてきた赤ちゃんとの間で生じるギャップや失望を最小限に防ぐための心理的機制が働いているのではないかという。

おそらく、こうしたこともあり、妊娠中期¹に急速に発達した母親のお腹の子どもについての表象は、妊娠後期¹に入ると、比較的安定したものへと徐々に落ち着きを見せるようである（Cohen & Slade, 2000）。この頃には、母親はお腹の子どもの性格や気質についてかなり明確なイメージを作り上げているようである（Zeanah, Zeanah, & Stewart, 1990）。妊娠後期になると、お腹の中での胎児の動きや活動に一定のパターンが見られるようになるといわれている（Brazelton & Cramer, 1990）が、母親もこうしたパターンを確実に知覚し得るようになるのだろう。Stainton (1985; 1990) によれば、妊娠8～9ヶ月の母親25人（初産婦・経産婦共に含む）を対象としたインタビューのなかで、すべての母親が胎児の動きの質や刺激への反応の強さについて言及し、また54%の母親が胎児の活動のサイクルについて描出しており、胎児が眠って

いる状態、静かで落ち着いている状態、活発に覚醒している状態をそれぞれかなり明確に認識していたという。

こうした胎動からの推測に基づいて、母親は次第にお腹の子どもの性格や気質のイメージを発達させていくものと考えられる。Zeanah, Keener, Stewart, & Anders (1985) の研究では、初産の母親38人を対象に、妊娠33週に乳児の気質評定の質問紙「Infant Temperament Questionnaire-Revised; ITQ-R」のうち6次元（「活動性」・「規則性」・「順応性」・「反応の強さ」・「気分」・「気の散りやすさ」）を用いて、お腹の子どもの気質に関して母親に評定を求め、さらに妊娠37週に再度ITQ-Rの評定を求めたところ、「気の散りやすさ」を除く気質の5次元において、妊娠33週と37週の母親の評定値の間に有意な相関が認められたことが報告されている。このことより、妊娠期における母親の想像上の子どもの気質の評定は、決してランダムなものではなく、すでに母親のなかでは、お腹の子どもの気質に関してかなり一貫したイメージが成り立っていることがうかがえよう。同様に、お腹の子どもの性格に関しても妊娠期からすでに明確なイメージが形成されているようである。Zeanah et al. (1990) は、妊娠9ヶ月の初産の母親35人を対象にインタビューを行ったところ、92%の母親がお腹の子どもの具体的な性格について描写しており、そのうち61%の母親がお腹の子どものに関して「活発な」といった活動性に関わる性格カテゴリーを描出していたことを報告している。そして、お腹の子どもの性格を表すことばとして次に多かったのは、感情に関わるもの（ex.「おおらかな」）や社会性に関するもの（ex.「社交的な」）であり、数多くの母親がこうした子どもの性格についてポジティブに思い描いていたという。

一方で、こうした気質や性格の他、妊娠期に母親がお腹の子どものについて、どのようなテーマの、あるいはいかなる構造的性質を有する表象を発達させるのかといった側面には明確な個人差が存在するようである。一般的には、妊娠後期には、母親一人ひとりの個人的な表象のパターンがより明確に現れ始めるといわれている（Cohen & Slade, 2000）。近年こうした妊娠期の母親の表象の個人差に着目し、表象を質の異なるいくつかのタイプに分類しようとする動きが見られる。例えば、Fava Vizziello et al. (1993) は、妊娠7ヶ月の母親51人を対象にお腹の子どものについてインタビューを行い、語りに現れた特定の支配的なテーマに基づいて、母親の表象を4つのタイプに分類している。すなわち、願望で組織化された表象（自己の理想の修復あるいは補償を果たす）、防衛で組織化された表象（自尊心を維持する機能を果たす）、恐怖で組織化された表象（緊張、不安、死の恐怖をもたらす）、組織化されていない無秩序の表象（葛藤やトラウマ、未解決の喪失と関係している）である。結果として、そこでは、45%の母親が恐怖で組織化された表象に、24%の母親が願望で組織化された表象に、22%の母親が無秩序の表象に、8%の母親が防衛で組織化された表象に分類されたという。

その一方で、こうした表象の内容的側面のみならず、表象の構造的特質にも着目して、母親の表象を分類する研究もあり、近年ではむしろこうした動きの方が主流になってきているようである。例えば、Zeanah & Benoit (1995) は、成人愛着面接（Adult Attachment Interview; 以下AAI）に基づいて、養育者の子どもに関する表象を測定する「Working Model of the Child Interview; 以下WMCI」という半構造化面接を開発している。WMCIは、語りの内容（ex. 乳児の扱いにくさ）や語りの情緒的トーン（ex. 喜び）に加えて、語りの構造（ex. 一貫性、柔軟性、描写の豊かさ）をも重視し、それらの特質を総合的に踏まえて、被面接者を、描写が豊かで柔軟

で一貫しており、子どもの受容や情緒的関与が高い「安定型 (Balanced)」、子どもからの情緒的距離が顕著な「非関与型 (Disengaged)」、混乱や葛藤が激しく、表象内にある種の歪みや偏りが見られる「歪曲型 (Distorted)」の3タイプのいずれかに分類するものであり、それらのタイプは順にAAIにおける「自律型 (Autonomous)」、「アタッチメント軽視型 (Dismissing)」、「とらわれ型 (Preoccupied)」に理論的に対応することが想定されている。そして、Benoit, Parker, & Zeanah (1997) は、このWMCIを妊娠後期の母親96人 (初産婦・経産婦共に含む) に実施したところ、64%の母親が安定型に、12%の母親が非関与型に、24%の母親が歪曲型に分類されたことを報告している。同様に、Huth-Bocks, Levendosky, Bogat, & von Eye (2004) も、このWMCIを用いて、妊娠後期の母親204人 (初産婦・経産婦共に含む) を対象に検討したところ、52%の母親が安定型に、30%の母親が非関与型に、18%の母親が歪曲型に分類されたという。ちなみに、Ammaniti et al. (2006) は、上述したWMCIとは別に、妊娠期における母親としての自己や子どもに関する表象の性質を測定する「Interview of Maternal Representations During Pregnancy;以下 IRMAG」というインタビューを独自に開発している。そこでも、インタビュー反応は、語りの内容とともに、あるいはそれ以上に、語りの構造的特徴 (ex.一貫性) に基づいて、「統合型 (Integrated)」、「限定型 (Restricted)」、「アンビバレント型 (Ambivalent)」の3タイプの表象に分類される (順にAAIにおける「自律型」、「アタッチメント軽視型」、「とらわれ型」に対応すると想定される)。そして、このIRMAGを、妊娠後期のローリスクの母親33人に実施したところ、67%の母親が統合型に、13%の母親が限定型に、20%の母親がアンビバレント型に分類されたという。

以上のことを要約すれば、妊娠期における母親の子どもについての表象の発達プロセスは、妊娠初期では未だ胎児の存在の現実性が乏しく、お腹の子どものイメージや表象はそれほど発達していないが、妊娠中期に入ると、胎動を通してお腹の子どもの存在がよりリアルに感じられるようになり、それに伴ってお腹の子どもについての表象が急速に成長していき、妊娠後期に入るとは、母親一人ひとりの表象の個人的パターンがより明確に現れ始めるといえるであろう。

1-(2)母親としての自己についての表象

妊娠期におけるもう一つの重要な課題は、母親としての自己についての表象を発達させていくことである (Cohen & Slade, 2000)。それまでの女性、妻、娘、あるいは職業人などとしての自己に関する表象 (Stern, 1995) は修正され、新たに母親という役割を中核とする自己についての表象が再組織化される必要があるのである。生まれてくるお腹の子どもの養育の責任を担う者として、子どもに安心と安全を提供する者として (Cohen & Slade, 2000)、自己の認識を確立することは、親となることへの移行プロセスにおいて非常に重要であると思われる。では、妊娠期に母親としての自己に関する表象はどのように発達していくのだろうか。

先の子どもに関する表象の発達プロセスで見られたように、母親としての自己に関する表象の発達においても、やはり一つの転換点は、胎動が始まる妊娠4～5ヶ月頃のようなものである。この頃になると、胎動がしっかりと感じられるようになり、また母親のお腹もやや膨らみを帯びてくるが、こうした身体的変化に伴って、母親の内面においても心理的变化が生じ、母親としての意識がより高まりを見せるという (Cohen & Slade, 2000)。Ilicai & Fisk (2004) によれば、妊娠

4～7ヶ月の母親に、子どもや母親としての自己、個人としての自己などに関して、形容詞リスト（ex.「明るい」、「元気な」）を提示し、それぞれ評定を求めたところ、母親としての自己の評定と個人としての自己の評定に有意な正の相関関係が認められたという。この結果より、彼らは、妊娠中期にはすでに、母親のなかで、個人としての自己と母親としての自己について、ある程度、統合された表象が形成されているのではないかと主張している。

そして、妊娠後期に入る頃には、母親としての自己に関するより明確な表象が作り上げられるようである。興味深いことに、Ammaniti et al (1992) は、妊娠28～32週の初産の母親23人に母親としての自己や実母に関する形容詞リスト（ex.「愛情に満ちた」、「受容的な」）の評定を求めたところ、母親は実母よりも母親としての自分自身をよりポジティブに評定したことを報告している。このように、母親としての自己が実母よりもよりポジティブに評定される傾向は、他の研究でも認められており（Fava Vizziello et al., 1993; Pajulo, Savonlahti, Sourande, Piha, & Helenius, 2001）、一般的に、妊娠期において、母親は、実母とは異なったよりポジティブな母親としての自己表象を作り上げていることが示唆される。

また、先の子どもについての表象と同じように、母親としての自己についての表象に関しても、母親一人ひとりによって表象のパターンが異なることが指摘されている。上述したFava Vizziello et al. (1993) の研究では、子どもについての表象のみならず、母親としての自己についての表象に関しても個別に検討されているが、結果として、妊娠7ヶ月の母親51人を対象としたインタビューでは、33%の母親が恐怖で組織化された表象に、27%の母親が無秩序の表象に、24%の母親が防衛で組織化された表象に、14%の母親が願望で組織化された表象に分類されたという。

以上、妊娠期における母親としての自己についての表象の発達プロセスは、子どもについての表象と同じように、胎動が始まる妊娠中期頃から表象が急速に成長していき、妊娠後期に入る頃には比較的安定したものへと落ち着き、母親一人ひとりの表象の個人的パターンがより明確に現れるものと思われる。おそらく、Cohen & Slade (2000) やHuth-Bocks et al. (2004a) が指摘しているように、妊娠が進むにつれて、お腹の子どもについての表象と母親としての自己についての表象は、互いに深く関わり合いながら、母親のなかで共に形成が進んでいくのであろう。

1-(3)子どもについての表象と母親としての自己についての表象との関係

これまで妊娠期における母親の子どもについての表象と母親としての自己についての表象に関してそれぞれ個別に検討してきたが、これらは相互にどのような関係を持っているのだろうか。

一般的には、母親としての自己についての表象と生まれてくるお腹の子どもについての表象は個別の構成体として、それぞれ独立に検討されることが多い。例えば、Zeanah & Benoit (1995) の「Working Model of the Child Interview」は、まさしくその名の通り、養育者の子どもに関する表象を測定するインタビューツールである。また、Fava Vizziello et al. (1993) も、語りの支配的テーマという観点から、妊娠期における母親のお腹の子どもについての表象と母親としての自己についての表象に関してそれぞれ個別に測定を行っている。

これらの研究では、両者の表象はそれぞれ個別の構成体として扱われているわけであるが、現実的には、両者はかなりのところ重なりが大きいようである。Ammaniti et al. (1992) は、

IRMAGインタビューを用いて、お腹の子どもについての表象と母親としての自己についての表象との関連性について検討を行っているが、両者の表象の構造的特性（ex.一貫性、柔軟性、描写の豊かさ）は、かなりのところ正の相関関係にあったことを認めている。つまり、お腹の子どもに関して描写が豊かで柔軟で一貫した表象を形成している母親は、同じように母親としての自己に関しても豊かで柔軟で一貫性のある表象を作り上げており、一方の表象が安定していれば、他方の表象も安定している可能性がかなり高いのである。同様に、Huth-Bocks et al. (2004a)も、WMCIインタビューを用いて、お腹の子どもについての表象と母親としての自己についての表象（WMCIのプロトコルをもとに、母親としてのコンピテンスやセルフ・エフィカシーを評定）との関連性を検討しているが、結果として、生まれてくるお腹の子どもに関して安定した表象を発達させている母親は、同時に母親としての自己に関しても安定した（母親としての強さと限界をバランスよく認識している）表象を発達させていたという。こうしたことから、近年では、子どもに関する表象も母親としての自己に関する表象も、共に一つの統合された「養育表象」（George & Solomon, 1996）として扱うのが適当ではないかと考える向きも生じ始めているようである（e.g. Ammaniti et al., 2006; Huth-Bocks et al., 2004a）。

2. 表象の規定因

妊娠後期に入る頃には、母親一人ひとりの表象の個人的パターンがより明確に現れるようになるわけだが、母親によっては、すでにお腹の子どもや母親としての自己に関して安定した表象を作り上げている母親もいれば、お腹の中で育ちつつある子どもや母親となることに対して葛藤や困惑が大きく不安定な表象を作り上げている母親も存在する。では、こうした妊娠期における母親の表象のパターンの個人差にはどのような要因が関係しているのだろうか。

まず、個人的な要因として挙げられるのは、数多くの研究者が指摘しているように、母親自身の幼少期の養育者とのアタッチメント経験である（e.g. Brazelton & Cramer, 1990; Cohen & Slade, 2000; Huth-Bocks et al., 2004a）。妊娠というライフイベントによって、母親のアタッチメント表象は活性化され、母親は過去の主要な養育者との経験を振り返りながら、次に生まれてくるお腹の子どもや母親としての自己に関する表象を新たに発達させていく（Cohen & Slade, 2000）。Slade & Cohen (1996)の事例研究では、母親が幼少期のアタッチメント経験に関してどのような表象を有しているかが、現在妊娠しているお腹の子どもの表象の質に大きく影響していることが詳しく述べられている。より具体的には、成人愛着面接（AAI）において幼少期の養育者との経験に関して（情緒的に距離を置きすぎたり、あるいは感情に過剰に巻き込まれることなく）自律的にバランスよく語ることができた母親は、お腹の子どもに関するインタビューのなかでも、子どもに関して豊かに生き生きと語ることができ、お腹の子への情緒的関与が強く見られたのに対して、過去の幼少期の経験を整合一貫して語ることができず、その内容が矛盾していたり、養育者に対する侮蔑（derogation）を示したりする母親は、お腹の子どもに対してもネガティブな感情が強かったり、お腹の子どもからの情緒的距離が顕著であったりと、全般的に不安定な表象を形成していたことがうかがえたのである。さらによりサンプルを広げて検討を行った研究でも、妊娠期に質問紙で測定された母親の幼少期のアタッチメント経験が、WMCIインタビューで測定された母親のお腹の子どもに関する表象と有意に関連しており、拒絶や愛情の希薄、

実母への強い怒り、幼少期の記憶の欠落などが強く見られる母親ほど、お腹の子どもの受容や感受性が低く、非一貫的かつ生硬で描写の乏しい表象を有していたという (Huth-Bocks et al., 2004a)。

しかしながら、ここで注意しなければならないのは、妊娠期の母親のお腹の子どもや母親としての自己についての表象は、母親自身のアタッチメント表象に基づいて形成されるものの、両者の表象は必ずしも合致しないということである。George & Solomon (1996) が指摘するように、アタッチメントシステムは保護を求めるために組織化されたものであり、養育システムは保護を与えるために組織化されたものである。したがって、アタッチメント表象と養育表象は互いに関連はするものの、両者には質的に、ある一定のずれが存在することも事実である (George & Solomon, 1996)。実際、Ammaniti et al. (2006) の研究では、妊娠後期のローリスクの母親を対象とした場合、成人愛着面接 (AAI) で測定された母親のアタッチメント表象は、安定自律型が86%、アタッチメント軽視型が11%、とらわれ型が4%であったのに対して、IRMAGインタビューで測定されたお腹の子どもや母親としての自己についての表象は、統合型が67%、限定型が13%、アンビバレント型が20%であり、アタッチメント表象に比べて、お腹の子どもや母親としての自己に関する表象は安定型の割合が相対的に少なかったことが明らかとされている。このことから、両者の表象の分類は必ずしも完全に一致するわけではなく、例えば、たとえアタッチメント表象は安定していても、お腹の子どもや母親としての自己についての表象に関しては安定していないといった母親も、一定割合、確実に存在するのだといえよう。

当然のことながら、妊娠期における母親のお腹の子どもや母親としての自己についての表象の形成には、こうした母親自身のアタッチメント表象のみならず、他にもさまざまな要因が関与しているものと思われる。まず、妊娠期の母親にとって重要なことは、今回の妊娠が望んだものか、あるいは計画したものかどうかであり、それによって妊娠期における母親の表象の質は大きく影響されるであろう。Pajulo et al. (2006) は、妊娠初期～後期の母親391人 (初産婦・経産婦共に含む) を対象に、子どもや母親としての自己やパートナーなどに関する形容詞リストの評定を求めたところ、妊娠を計画していなかった母親は、計画していた母親よりも、子どもや母親としての自己のみならず、パートナーや実母に関しても、すべてその評定がよりネガティブなものであったことを報告している。また、7歳以下の子どもが2～3人いる母親は、7歳以下の子どもが1人あるいは全くいない母親よりも、形容詞の評定がよりネガティブであったことも明らかとされ (Pajulo et al., 2006)、子どもの数という社会文脈的な要因もまた母親の表象の内容に影響していることがうかがえる。これと同様に、ソーシャルサポートの低さ、社会的環境の困難さ、抑うつ、薬物依存などの特徴を持つハイリスクの母親では、ローリスクの母親よりも、妊娠期の表象の内容が全般的によりネガティブであり、なかでも母親としての自己やパートナーについての表象の内容がとりわけネガティブであったという (Pajulo et al., 2001)。さらに、パートナーからのドメスティック・バイオレンス (DV) を受けていない母親では、WMCIインタビューで測定されたお腹の子どもに関する表象の分類が、安定型が60%、非関与型が23%、歪曲型が17%であったのに対して、DVを受けている母親では、安定型はわずか33%に過ぎず、非関与型が41%、歪曲型が26%と不安定型が多く (Huth-Bocks et al., 2004b)、パートナーとの関係性の質もまた母親の表象にかなり影響することが推察される。

このように、妊娠期の母親の表象には実にさまざまな要因が関与しており、個人的要因 (ex. 幼少期のアタッチメント経験、抑うつや不安、化学物質依存、妊娠の計画) や社会文脈的要因 (ex. 社会経済的地位、子どもの数、ソーシャルサポート、夫婦関係の質) が相互に複雑に絡み合っており、妊娠期における母親の表象の形成に影響を及ぼしているものと考えられる。

3. 表象の時間的連続性と変化

妊娠期に作り上げられた母親の表象は、現実の子どもの誕生によってどのような影響を受けるのだろうか。一見すると、妊娠期から出産後という激変期において、現実の子どもの誕生は、それまで作り上げられてきた母親の表象世界を劇的に変化させてしまいそうに思われる。しかしながら、これまでの実証研究の多くは、予想外にも出産前後の表象の時間的連続性の性質を示した結論を得ているようである。

例えば、80年代後半に盛んに行われた、想像上の子どもの気質に関する一連の研究は、妊娠期に母親がお腹の子どもの気質について作り上げているイメージが、出産後においても現実の子どもの気質の知覚を方向付けていることを明らかにしている。例えば、Zeanah et al. (1985) の研究では、妊娠37週に初産の母親38人に気質質問紙ITQ-Rの評定を求め、さらに出産後1ヶ月に再度ITQ-Rの評定を求めたところ、気質の6次元中3次元 (「活動性」・「規則性」・「順応性」) において有意な相関が見られたことが報告されている。さらには、妊娠期の気質の評定が、出産後間もない時期のみならず、生後6ヶ月の子どもの気質評定とも関連しており、気質の6次元中3次元 (「活動性」・「規則性」・「気分」) において有意な相関が認められたという (Zeanah, Keenr, & Anderson, 1986)。このことより、妊娠期に母親がお腹の子どもの気質について作り上げているイメージが、出産後数ヶ月にわたって維持される傾向があり、現実の子どもが生まれた後も引き続き母親の知覚を方向付ける役割を果たしているものと思われる。

また、こうした表象の内容のみならず、表象の構造もまた時間的にかなり連続するもののようである。Benoit et al. (1997) は、妊娠後期と生後11ヶ月に母親80人を対象にWMCIインタビューを実施したところ、結果として、両時点での表象の分類は、全体として80%の母親において合致していたことが示されている。特に、安定型と歪曲型において妊娠期と生後の有意な分類の一致が認められたという。これと同様に、Theran, Levendosky, Bgat, & Huth-Bocks (2005) の研究でも、180人の母親のうち、全体として71%の母親で、妊娠後期と生後12ヶ月のWMCIの表象の分類が一致しており、特に安定型の母親において、妊娠期と生後の分類が有意に一致していたことが示されている。妊娠期にお腹の子どもに関して安定した表象を作り上げている母親は、やはり生後12ヶ月においても安定型と分類されることが多かったのである。

このように、妊娠期に母親が発達させた表象は、現実の子どもが生まれた後も引き続き維持される傾向にあるわけであるが、ここで注意しておかなければならないのは、妊娠期から出産後にかけて表象の時間的連続性が強く認められるのは、特に安定型の母親においてということである。従来、乳児のアタッチメントに関して、アタッチメントが安定型の乳児は、不安定型の乳児よりも、その安定したアタッチメントの質が長期的に維持されやすいことが指摘されてきた (Theran et al., 2005) が、こうした傾向は母親の表象に関しても同様に当てはまるようである。

一方で、このことは、裏を返せば、たとえ妊娠期に母親が不安定な表象を発達させていたとし

でも、妊娠期から出産後にかけて、表象が大きく変化する可能性も高いということであろう。Ammaniti et al (2006) は、妊娠後期と生後3ヶ月に子どもや母親としての自己についてのインタビューを実施したところ、ローリスクの母親33人の場合、妊娠後期のIRMAGインタビューでは、安定した統合型の割合が67%であったのが、生後3ヶ月のインタビューでは87%に増加したこと、またハイリスクの母親（抑うつや心理社会的問題を抱えている）58人の場合、妊娠期はわずか41～45%に過ぎなかった統合型が、生後3ヶ月においては82%にも急増したことを明らかにしている。このことから、たとえ妊娠期に母親がお腹の子どもや母親としての自己について不安定な表象を発達させていたとしても、出産後には安定した表象へと変化する可能性が十分に備わっているといえるだろう。

では、こうした妊娠期から出産後にかけての母親の表象の変化には、どのような要因が影響しているのだろうか。Theran et al. (2005) によれば、妊娠期のWMCIインタビューで不安定型（非関与型や歪曲型）の表象を有していても生後12ヶ月のWMCIインタビューで安定型の表象へと変換することができた母親（became Balanced）は、妊娠期から生後12ヶ月にかけて連続して不安定な表象を保持していた母親（remained Non-Balanced）よりも、妊娠期にうつ症状が少なかったこと、シングルマザーの割合が低かったこと、生後12ヶ月においても同じパートナーとの関係が持続していたこと、比較的高収入であったこと、などの特徴が認められたという。また、興味深いことに、彼らの研究では、少数ながら、妊娠期に安定型の表象であったにもかかわらず、生後12ヶ月には不安定型の表象へと変換してしまった母親（became Non-Balanced）も存在していた。これらの母親は、妊娠期から生後12ヶ月にかけて連続して安定した表象を保持していた母親（remained Balanced）と比べて、妊娠期にすでにシングルマザーである比率が高かったこと、低収入であったこと、またパートナーからの身体的虐待（DV）を受けていたこと、などの特徴が認められた。このことより、妊娠期から出産後にかけての表象の変化には、収入やパートナーとの関係性、抑うつといった要因が影響しており、特にパートナーの存在や関係性の質が出産後の母親の表象を安定したものにも不安定なものにも変えうる強い影響力を持つことが示唆される。

もちろん、こうした母親要因のみならず、子ども自身の要因もまた表象の質の変化に影響を及ぼす可能性がある。Ammaniti et al. (2006) は、無事に健康な子どもが生まれてきたそのこと自体が母親の表象を安定したものへと変えうる力を持っていると指摘している。こうした子どもの健康状態や気質をはじめとした子ども自身の特性もまた、母親側の要因とも重なり合って、母親の表象の変化あるいは維持に寄与しているものと思われる。

4. 表象と養育、アタッチメントとの関連性

すでに妊娠期に母親はお腹の子どもや母親としての自己についての表象を発達させているわけであるが、こうした妊娠期の表象が、生後の母親の養育行動や子どもの発達にどのような影響を及ぼすのか、研究者の最も強い関心はこの問いの解明にあるともいえる。

まず、生後の養育行動との関連性に関して、Theran et al. (2005) は、妊娠期から生後12ヶ月にかけて、WMCIインタビューで測定された子どもに関する表象が変化した母親と維持された母親との間で、生後12ヶ月における母子相互作用の質を比較している。結果として、妊娠期から

生後にかけて連続して安定型を維持していた母親 (remained Balanced) は、生後に安定型を獲得した母親 (became Balanced) よりも、母子相互作用において、より感性が高く、温かさがあり、子どもへの関与が高かったという。また興味深いことに、生後に不安定型へと変化した母親 (became Non-Balanced) は、妊娠期から連続して不安定型を維持していた母親 (remained Non-Balanced) よりも、母子相互作用において、より感性が高く、喜びの感情が強く、過剰な統制が低かったという。こうしたことから、妊娠中に母親の表象が安定型であるということは、たとえ生後に表象が不安定型へと変化したとしても、行動のうえでは、より安定維持型 (remained Balanced) の母親が示すのに近い相互作用を可能にすることが想定される。彼らによれば、妊娠期の母親の安定した表象は、後の母子相互作用の質に緩衝的影響をもたらす (buffer) 可能性が高いのではないかとする。

そして、妊娠期の表象が生後の子どもの発達にどのような影響を及ぼすのかという、子どもの発達との関連性に関しては、主に子どものアタッチメントの側面から検討されている。Benoit et al. (1997) は、妊娠後期の母親85人を対象に、子どもに関する表象を測定するWMCIインタビューを実施し、生後12ヶ月に子どものアタッチメントの質を測定する「ストレンジ・シチュエーション (SS)」を実施したところ、全体の74%の母親において、妊娠期の母親の表象の分類と生後の子どものアタッチメントの分類との間に理論的に想定されるとおりの一致 (「安定型」(WMCI) - 「安定型」(SS); 「非関与型」(WMCI) - 「回避型」(SS); 「歪曲型」(WMCI) - 「アンビバレント型」(SS)) が認められたことを報告している。特に、安定型の母親において高い一致が見られ、妊娠期に安定型であった母親の実に91%の子どもが、生後12ヶ月において安定したアタッチメントを示したという。同様に、Huth-Bocks et al. (2004) の研究でも、189人の母親のうち60%の母親において、妊娠期におけるWMCIでの母親の表象の分類と生後12ヶ月におけるSSでの子どものアタッチメントの分類が一致しており、妊娠期に安定した表象を発達させている母親の子どもほど、生後12ヶ月において安定したアタッチメントを示したことが明らかとされている。ちなみに、母親自身のアタッチメント表象の質を測定するAAIと子どものアタッチメントの質を測定するSSにおける分類の対応に関して、もっとも高い一致が認められるのはAAIにおける安定自律型の場合であることが指摘されている (George & Solomon, 1999) が、WMCIで測定される子どもについての表象に関しても、安定型の母親でもっとも高い一致が認められ、幼少期のアタッチメント経験に関しても、あるいは自身の子どもの関しても安定した表象を形成している母親ほど、安定したアタッチメントを示す子どもを有しやすいといえるのであろう。このように、まだ子どもが生まれていない妊娠期の段階の母親の表象の質が、子どもが生まれた後の子どものアタッチメントの質をある程度予測しうるということが実証的にも確かめられ、後の母子間の関係性の質を予測する因子として、妊娠期の母親の表象の重要性が示唆されるのである。

5. 今後の課題

以上、本稿では、妊娠期における母親のお腹の子どもや母親としての自己についての表象に関して、主にアタッチメント研究領域で積み上げられてきたこれまでの研究知見を概観・整理し、論述してきた。こうした一連の知見をまとめると、①妊娠期にすでに母親はお腹の子どもや母親

としての自己に関する表象を発達させており、妊娠後期には母親一人ひとりの表象の個人的パターンがより明確に現れること、②表象の個人差には、母親の個人的要因（ex.養育者とのアタッチメント経験）や社会文脈的要因（ex.ソーシャルサポート）が影響していること、③妊娠期から出産後にかけて母親の表象は連続して維持される傾向にあり、特に妊娠中に安定した表象を発達させている母親ほど、生後も安定した表象を維持しやすいこと、④妊娠期の母親の表象が生後の母親の養育行動や子どものアタッチメントと関連しており、妊娠中に安定した表象を発達させている母親は、生後の母子相互作用において適切な養育行動（ex.敏感性）を示し、また安定したアタッチメントを示す子どもを有しやすいことが結論づけられる。

このように90年代半ば以降、妊娠期の母親の表象への関心の高まりにより、数多くの実証的知見が積み上げられてきたわけであるが、その一方でこの研究領域における課題も残されている。まず、第一に、これまで明らかとされてきた妊娠期の養育者の表象に関する知見は、すべて母親に限定されたものであるということである。本稿では、妊娠期における母親の表象に焦点を当ててきたわけであるが、それは父親に関する実証的知見が殆ど存在しないという現状があるからである。母親と違って、お腹の子どもの存在を間接的にしか感じるできない父親の場合、妊娠期にお腹の子どもや父親としての自己に関する表象はどのように発達していくのか、実際に子どもが生まれた後は表象がどのように連続あるいは変化するのか、母親と同じように、生後の養育行動や子どものアタッチメントの発達を予測しうるのかなど、父親に関してはまだまだ未検討な問いが多く残されている。近年、養育者としての父親への関心が高まっているが、こうした妊娠期の父親の表象に着目することにより、父親となることへのプロセスの理解がより深まり、さらには、父親-母親-子どもという三者関係の視点から子どもの発達の理解を深めるうえでも、非常に有意義な知見を与えてくれるのではないかと思われる。

二つ目に、妊娠期の母親の表象が生後の子どものアタッチメントの質に影響することが実証的にも示されているわけであるが、そのメカニズムやプロセスについては十分に解明されていないということが挙げられる。おそらく母親の表象は、敏感性をはじめとした種々の養育行動を媒介として、子どものアタッチメントの質に影響するものと思われるが、従来考えられていたよりも養育者の敏感性は子のアタッチメントへの説明力を持たないことが指摘されている（George & Solomon, 1999）。そのため、近年では新たに養育者の「内省的機能（reflective functioning）」（自己や他者を心的状態の観点から内省・理解する能力; Fonagy et al., 2002）という認知的能力が、媒介要因の一つとして注目され始めている（Pajulo et al., 2006）。今後は、養育者の養育行動のみならず、こうした養育者の認知機能も含めたより包括的な視点から、そのメカニズムやプロセスの解明を追究していくことが必要であると思われる。

そして、三つ目に、妊娠期における母親の表象が長期的にはどれほどの影響力を持っているのかということに関しては未だ明らかにされていないということが挙げられるだろう。これまでの研究で、妊娠期の表象が生後も連続しやすいこと、生後の養育行動や子どもの発達に影響を及ぼすことが報告されてきたが、これらはせいぜい生後12ヶ月までの比較的短期間の追跡に終始しており、幼児期までにわたる長期的な影響力については検証されていない。また、生後の子どもの発達との関連性に関しても、主に乳児期のアタッチメントの発達に焦点が当てられており、子どもの社会的発達や認知的発達に及ぼす影響力についてはわかっていない。そのため、今後は、よ

り長期的な視点で、妊娠期の母親の表象が、母親の養育行動や子どもの幅広い発達側面に如何なる影響をもたらしているのか、さらに追跡を行っていくことが必要であろう。

最後に、妊娠期における母親の臨床的支援の可能性について示唆を述べたい。母親の表象は、これまでも親-子心理療法における主要な構成要素として重視されてきたわけであるが (Stern, 1995)、特に妊娠期は、親となることへの移行期でもあり、母親の表象世界が劇的に変容、再編されやすい時期である。そのため、それが母親に成長と統合の機会を与えうると同時に、一方で母親の感情状態をきわめて不安定なものにさせてしまう危機ともなりうる (Cohen & Slade, 2000)。こうしたことからすれば、妊娠期はもっとも介入に適した時期であり、より早期からの臨床的支援が後の安定した親子関係の形成を支えるうえでも非常に有効なものとなりうるのではないと思われる。さらに、妊娠期の母親の不安定な表象が周囲からのサポートや好意次第で安定したものへと変化する可能性が十分にあること (Theran et al, 2005) も考慮に入れるならば、妊娠期の (特に母親の表象に焦点を当てた) 介入の意義は一層大きいものと思われる。今後、我が国においても、妊娠期から養育者を支援していく、より早期からの育児支援体制の確立と充実が望まれよう。

- ¹ 本稿では、現在の産科学の定義に従い、妊娠初期は妊娠16週未満を、妊娠中期は妊娠16~27週を、妊娠後期は妊娠28週以降を意味する。

文献

- Ammaniti, M., Baumgartner, E., Candelori, C., Perucchini, P., Pola, M., Tambelli, & Zampino, F. (1992). Representations and narratives during pregnancy. *Infant Mental Health Journal*, 13, 167-182.
- Ammaniti, M., Speranza, A.M., Tambelli, R., Muscetta, S., Lucarelli, L., Vismara, L., Odorisio, F., & Cimino, S. (2006). A prevention and promotion intervention program in the field of mother-infant relationship. *Infant Mental Health Journal*, 27, 79-90.
- Benoit, D., Parker, K.C.H., & Zeanah, C.H. (1997). Mothers' representations of their infants assessed prenatally: Stability and association with infants' attachment classifications. *Journal of Child Psychology & Psychiatry*, 38, 307-313.
- Brazelton, T.B. & Cramer, B.G. (1990). *The earliest relationship: Parents, infants, and the dram of early attachment*. Reading, MA, US : Addison-Wesley.
- Cohen, L.J. & Slade, A. (2000). The psychology and psychopathology of pregnancy. In C.H. Zeanah(Ed.), *Handbook of infant mental health*. New York, London: Guilford Press.
- Fava-Vizziello, G., Antonioli, M. E., Cocci, V., & Invernizzi, R. (1993). From pregnancy to motherhood: The structure of representative and narrative change. *Infant Mental Health Journal*, 14, 4-16.
- George, C. & Solomon, J. (1996). Representational models of relationships. *Infant Mental Health Journal*, 17, 198-216.
- George, C. & Solomon, J. (1999). Attachment and caregiving. In J. Cassidy & P. Shaver (Eds.), *Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications*. (pp. 649-670). New York: Guilford Press.
- Huth-Bocks, A. C., Levendosky, A. A., Bogat, G. A., & von Eye, A. (2004a). The impact of maternal characteristics and contextual variables on infant-mother attachment. *Child*

- Development*, 75, 480-496.
- Huth-Bocks, A. C., Levendosky, A. A., Theran, S. A., & Bogat, G. A. (2004b). The impact of domestic violence on mothers' prenatal representations of their infants. *Infant Mental Health Journal*, 25, 79-98.
- Ilicali, E. T. & Fisek, G. O. (2004). Maternal representations during pregnancy and early motherhood. *Infant Mental Health Journal*, 25, 16-27.
- Lumley, J. M. (1982). Attitudes to the fetus among primigravidae. *Australian Pediatric Journal*, 18, 106-109.
- Pajulo, M., Helenius, H., & Mayes, L. (2006). Prenatal views of baby and parenthood. *Infant Mental Health Journal*, 27, 229-250.
- Pajulo, M. T., Savonlahti, E., Sourander, A., Piha, J., & Helenius, H. (2001). Prenatal maternal representations. *Infant Mental Health Journal*, 22, 529-544.
- Slade, A. & Cohen, L. J. (1996). The process of parenting and the remembrance of things past. *Infant Mental Health Journal*, 17, 217-238.
- Stainton, M. C. (1985). The fetus: A growing member of the family. *Family Relations*, 34, 321-326.
- Stainton, M. C. (1990). Parents' awareness of their unborn infant in the third trimester. *Birth*, 17, 92-96.
- Stern, D.N. (2000). 親-乳幼児心理療法：母性のコンステレーション（馬場禮子・青木紀久代，訳）東京：岩崎学術出版社。（Stern, D.N.(1995). *The motherhood constellation: A unified view of parent-infant psychotherapy*. New York: Basic books.）
- Theran, S.A., Levendosky, A.A., Bogat, A., & Huth-Bocks, A.C. (2005). Stability and change in mothers' internal representations of their infants over time. *Attachment & Human Development*, 7, 253-268.
- Zeanah, C. H. & Benoit, D. (1995). Clinical applications of a parent perception interview in infant mental health. *Infant Psychiatry*, 4, 539-554.
- Zeanah, C.H., Keener, M. A., & Anders, T. F. (1986). Developing perceptions of temperament and their relation to mother and infant behavior. *Child psychology and Psychiatry*, 27, 499-512.
- Zeanah, C.H., Keener, M.A., Stewart, L., & Anders, T.S. (1985). Prenatal perception of infant personality: A preliminary investigation. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 24, 204-210.
- Zeanah, C. H., Zeanah, P. D., & Stewart, L. K. (1990). Parents' constructions of their infants' personalities before and after birth: A descriptive study. *Child Psychiatry and Human Development*, 20, 191-206.

（教育方法学講座 博士後期課程1回生）

（受稿2006年9月8日、改稿2006年11月28日、受理2006年12月7日）

Review on Mothers' Prenatal Representations of Their Unborn Infants and Their Developmental Determinants and Outcomes

MOTOSHIMA Yuko

This paper aimed to review the growing body of previous research on pregnant mothers' representations of their unborn infants and self as mother. The first purpose was to reveal the developmental process of maternal representations concerning their unborn infants and self as mother in the course of pregnancy. And then, the findings on the determinants of the quality of maternal representations, its stability and change over time, and the impact of pregnant mothers' representations on their care-giving behaviors and attachment relationships with their infants after birth were overviewed. Finally, the theoretical implications and future directions in this research area were discussed.